

I・C・Uを象徴される根津真知子先生

Dr. Machiko Netsu: Symbolizing I・C・U

富山 真知子 TOMIYAMA, Machiko

● 国際基督教大学
International Christian University

ICUはIとCとUの3文字で語られることが多い。根津真知子先生ほどこの3つを具現化されていらっしゃる先生はないように思う。まず、Iである。日本の草分け的存在であるICUの「外国語としての日本語教育」。この専門分野に身を置かれていることがまさにIであるが、ご自身のご経歴によっても、ICUの日本語教育にIの新風をたくさん吹いて下さった。テキサス大学オースティン校での博士号の取得、ハワイ大学マノワ校で日本語教育に長年携われた後にICUにご着任いただいたのである。先生のご指導のもと、「日本語教育養成プログラム」の修了書を手にして、海外の現場へ羽ばたいて行った卒業生は数知れない。行政面においてもJLP主任、国際交流主任、日本語教育研究センター長を歴任され、Iにご貢献下さった。プライベートではハワイご出身のご主人とそのご家族を本当に愛され、大切にされ、日本とハワイの架け橋になっておられる。

根津先生を語るに、Cなしには語れない。忙しく慌ただしいICUの教員生活の中で、「忘れてはだめよ」とCを強烈に意識させてくださるのは、いつも根津先生だ。神の御前で本当に大切なものは何なのか、それをダメな私に喚起してくださる。根津先生の毎日には、どのような場所においても、どのような状況においても、神の存在があるのだということを強く感じるのは私だけではあるまい。根津先生に接する機会のあった学生は、それぞれに同様な思いに打たれたということ、同僚

として私は周知している。根津先生のお導きは甘い、やさしい言葉で学生を癒すという類いのものではない。もの静かにではあるが、時には毅然と、物事の道理をおっしゃり、苦言を呈されることもある。それでも、言われた者の心が温まるのは、根津先生の中にはいつも神の存在があるからに他ならない。そのような根津先生の、最近のICUにはCが足りないとお嘆きに、私は頭を垂れ、深く反省するのである。

Uについては、まさに理論と実践の両方を大切にされるのが根津先生で、現場を大事にしなければ、何も語れないという強いご信念を貫かれた。先生は日本語教育、私は英語教育ということで、ICU言語教育の「ダブル真知子」として一翼を担わせていただいた。語学科時代に、目標言語は何であれ、コアとなる理論や実践を教える基礎科目の必要性をご提案下さり、改革後の現在まで「言語教授法原論」を交代で担当させていただいている。実践のひとつに教科書のご執筆があるが、ご着任早々、*Japanese for College Students* という全3巻からなる日本語の教科書をスタッフの方々と執筆され、編集責任者としてのご苦労も多かったとうかがっている。実践のさらなる証はオーストラリアでの「海外日本語教育実習」の開始と実施に尽力されたことである。日本語教員養成プログラムの実習機会を、模擬授業だけでなく、現場の教壇で与える、それも海外に求めるその姿勢はまさに根津先生の教育信念そのものである。その教

員養成のためならば当たり前のことと、年18コマのノルマをはるかに越えて、ご奉仕下さった。加えて、毎年のサマープログラムである。根津先生にはリープ期間以外には、長期のブレイクはなかったと想像する。しかし、根津先生が愚痴をこぼされたのを私は聞いたことがない。

幸運にもプライベートのお付き合いもさせていただいた。私が着任した際、スラッシャー先生が家族共々ご自宅にお招き下さり、根津先生のご家族にお引き合わせ下さった。それ以来のお付き合いである。ご出身の長野が私のルーツと重なることもあり、先生にはすぐさま懐かしさにも通じる何かを感じた。ことが起きるとすぐに慌てる私、愚痴の多い私は何度先生のオフィスをノックしたことか。高価ではないけれど、おいしいものも一緒にたくさんいただいた。「笑うのは体にいいのよ」とそれを実践しておられる先生のおそばでは、ささいなことでも心底おかしく、大笑いをした。

根津先生のいらっしゃらないICUはどうなってしまうのか、不安ばかりが募る。しかしながら、これからの人生はご主人のため、そしてハワイのご家族と共に歩みたいというご希望はいかにも根津先生らしい。大きな、大きな感謝とともに先生をハワイへお見送り申し上げる。